

「家政学の本質とその展開（1）」

— その目的・対象 —

村 尾 勇 之

1 序 論

すべての学問の成立過程が、語っているように、家政学も実用的な問題を解決するところからはじまっている。日常的な課題を、どう解決していったらよいか、こうした関心にこたえるための努力がなされ、その知識が集大成されていくところに学問成立の基礎がみられた。それらを抽象してみると、人間の生命活動の中で、直接、人間の生命を維持することに関連した問題、すなわち、1つは衣食住に関連した問題、1つは家族の生命を維持するための家庭の経営に発する諸問題であるということがいえる。それらの研究はこれまで、家庭を場として行われる生活に関連するものとして、学問としての目的を与えられ、知識の集成をみることになったものである。しかし、それはあまりに多様な学問的知識の集成として複雑であり、家政学という学問の体系は、必ずしも家政学者の一致をみるところまでいかない。個々の分野における研究は、それぞれ目的とそれに対する最適の手段を追求しながら、家政学という統一的目的に対する手段として体系づけられるに至っていない。多くの学者によってこれまで試みられてきた結論は、家政学の全体系においていまだ科学としてマックスウェーバーのいう「客観的に妥当な真理^{註①}」としての地位を与えられていないし、ときには家政学の目的をさえ、充分に人々に理解させることができないでいる。

こうした現実には、また①文部省の短期大学家政科設置基準の教科内容の中に、家政学原論という教科が独立しておかれていないこと、②日本家政学会における研究発表分科会において、家政学原論は、「児童・教育その他」の中に含められ独立した位置づけがされていないということ、③家政学会誌における家政学原論としての内容をもつ論文が、同じような内容のものが学会において発表を認められておりながら、論文としてでなく「資料」として掲載されていること、④また、家政学原論に関する学会誌における掲載論文数は、1号から82号までの間に、973件のうち15件を数えるのみだということ——^{註②}といった事実が、それを示し、そうした傾向を助長しているといえよう。

この論文をかくにあたっての基本的な課題は、家政学とはいかなる学問であるのかを、家政学の基礎、目的、対象、体系をのべる中で明らかにしたいことである。また、家政学の目的を達成するための手段としての方法論は、対象と体系をのべる中において必然的に理解されるは

ずである。

2 家政学の基礎

人間の存在を規定するものは何か、人間の存在そのもの、人間が存在しているという事実は、どういうことを意味しているか。それを考えるためには、まず存在するものが何かを考えることが必要である。存在するものは、主体者としての人間とそれ以外の自然そのものである。主体者である人間が、その生命をもって活動するとき、必然的に関係をもたざるをえないものは、現実に存在するもの以外のものではありえない。人間と自然が存在し、それらは主体者である人間と自然との関係、人間と人間との関係として現象する。つまり、人間の生命活動は、自然との関係と人間との関係にもとずいて展開されているのであり、従って人間の生命活動を制約するものは、まさにこの2つの存在の質と量、そしてこの二つの関係のあり方だということになるはずである。そして、この場合、人間そのものの存在の生命活動における契機をなすものが、欲望である。これは、人間存在のもっとも本質的動因である。

さて、人間の生命活動が欲望を契機として展開されるとき、自然との関係は、人間による働きかけ、すなわち人間の労働によってはじめての関係が生ずる。一定の目的をもち、労働を手段とするところ、そこには、当然一定の報酬が存在する。人間の生命活動にとって必要な物は、こうして作りだされるわけである。また、さらに人間と人間との関係においては、人間が生命活動を展開するための必要に応じて、いろいろなかたちでの有機的な人間関係が生ずるのであって、そうした一定の目的にもとづく人間関係が、いろいろな人間集団をつくりだし社会を形成しているわけである。

これを学問の世界にみる場合、人間の自然に対する学問的追求が、自然科学という分野を形成することになり、人間の社会に対する学問的姿勢が社会科学を生み出すということが出来る。それぞれ自然現象、社会現象にひそむ本質をみきわめることによって、人間の生命活動上のそれぞれの目的にもっとも適当した自然との関係のあり方、人間関係、社会関係のあり方を追求することになるわけである。

家政学は、この意味で本質的に社会科学のジャンルに属するものである。その目的はともかくとして、いまここで家政学の対象が、家、家庭、家族生活、家庭生活……等々の、いずれかであるとして、そうした存在は、一定の人間関係によって成立する社会的な現象である。それらは、うたがいもなく社会的な現象形態をなすものである。家政学はそうした社会現象の本質をみきわめることによって、はじめて正しく学問としての目的を与えられることができるのである。

それでは、こうした家政学という学問を歴史的視点をもって、いま一度考えてみることにしよう。

人間の歴史を、人間がつくるためには、まずなによりも生きることができなくてはならな

い。私たちの歴史は、そのことを第一の前提としてはじまった。それでは、生きた肉体的人間が生きるということは、どういうことであるのだろうか。それは、前にものべたようにいうまでもなく、食べることであり、着ることであり、住むことである。ここに人間の生存の条件があり基本的な欲求があるということは、だれも否定することができない。こうした基本的な欲求にもとずいて、人間が生命活動をしていくとき、人間の歴史はじまったといえるのであるが、それでは、こうした歴史の継続的な発展を可能にしてきたものは、一体いかなるものであるのだろうか。それについて、つぎに2つのモメントを示すことによって、私の考えをすすめてみることにしよう。

その1つは、人間の基本的な欲求を充たすために行動するということ、あるいはその対象となるものをつくりだすということ、さらにそれらの欲求をみたすために必要な手段をつくりだすということである。マルクスは、これを「物質的生活そのものの生産」といつているが、これは要するに、人間が生命を維持するために必要な物質を求めるための生命活動を継続的に持続していくこと、つまりそのような生命活動を人間が毎日の生活の中でつくりだすことを意味している。マルクスは Die Deutsche Ideologie 「ドイツイデオロギー」の中の歴史に関してのべた部分において「第1の歴史的行為はこれらの欲望（食うことと飲むこと、住むこと、着ること、そのほかなおいくつかのこと）をみたすための手段の産出、すなわち物質的生活そのものの生産である」とのべ、さらにあらゆる歴史的な理解にさいして必要なこととして、第1の点^{註④}をのべたあと、第2の点として欲望そのものについて「満足された最初の欲望そのもの、満足させる行動、および満足のためのすでに手に入れた道具があたらしい欲望へみちびくということであり——そしてあたらしい欲望のこの産出こそ第1の歴史的行為なのである。」^{註⑤}と説明している。エンゲルスはかれの Ludwig Feuerbach und der Ausgang der Klassischen Deutschen Philosophie 「フォイエルバッハ論」の中で「人間は、その歴史がどんな結果を生むにせよ、各人が各自の意識的に意欲された目的を追求することによって、その歴史をつくる。そしてこれらのさまざまな方向に働く多くの意志と外界にたいするこれらの意志のさまざまな作用との合成力が、まさに歴史なのである。したがって問題は、これら多くの個人がなにを欲しているかということである。」^{註⑥}とのべているのであるが、「個人がなにを欲しているか」という発想にもとづく第1の歴史的行為こそ、さきにのべた「これらの欲望」なのである。

要するに、歴史をつくり、歴史の継続的な発展を可能にする第1のモメントは、いまのべたような基本的な欲望にもとずいて、物質的生活そのものを生産するということ、そしてここにのべられた欲望は、「第2の点」として説明をしたような法則をもって拡大再生産されていくということなのである。

人間が生命活動をはじめて、歴史をつくりだし、歴史の継続的な発展を可能にする第2のモメントは、男性と女性の間における人間関係、社会関係が、欲望をモメントとして生まれ、新しい生命、人間をつくりだすということである。この関係は、物を求め、つくりだすための協

働にもとずいてうまれる人間関係、社会関係と同じように、人間の歴史の上で、もっとも根元的な、さいしょの社会的な関係であるということがいえる。マルクスは、これについて、つぎのようにのべている。「ここにはじめからただちに歴史的発展のうちへいりくんでくるところの第3の関係は、自分自身の生活を日々あらたにつくる人間が他の人間をつくりはじめること、すなわち繁殖しはじめることであり——夫と妻との、親と子との関係、すなわち家族(Familie)である。」^{註①}

マルクスは、私の叙述にしたがっていうならば、第1のモメントと第2のモメントを「生命の生産」^{註②}とよんでいる。この2つのモメントにもとづく「生命の生産」、かれによるなら「労働における自己の生命の生産と生殖における他人の生命の生産」^{註③}の間の関連についてのべたマルクスの指摘は、歴史を法則的にみる上に、またかれの歴史観を知るために、きわめて重要な意味をもっている。すなわちいまのべた2つの生産は「そのまますぐに2重の関係として——一方では自然的な、他方では社会的な関係として——あらわれる。ここに社会的というのは、どんな条件のもとにしても、どんな様式によるにしても、またどんな目的のためにしても、いくたりかの個人の協働という意味である。ここからつぎのことがあきらかになる。すなわち、一定の生産様式あるいは産業段階はいつも一定の協働様式あるいは社会的段階とむすびついており、この協働様式がそれ自身1つの『生産力』(Produktivkraft)であるということ、そして人間の達しうる生産諸力の量は、社会的状態を制約し、したがって『人類の歴史』(Geschichte der Menschheit)はいつも産業および交換の歴史とのつながりにおいて研究され論究されねばならないということである。」というのが、それである。自分の生活に必要な物をつくりだすということも、新しい生命をつくりだすということも、1人の生命活動、労働による結果ではない、協働によってもたらされるものだということ、そして、物をつくりだす場合にも、自然が豊富であるのか、そうでないのか、その質はどうかといったあらゆる自然的条件が、関係してくるし、さらに人間の社会的な関係を示す家族のあり方にしても、自然によってつくりだされたものが質的にどんなものであり、それが量的に沢山あるのか、少ししかないかによって家族生活のあり方が制約されるということ、ここでは説明しているわけである。

マルクスの歴史についてのみかたは、「ドイツイデオロギー」によると、次のようである。マルクスは歴史の根本条件についてのべたあと、歴史的に理解しようとするあらゆる場合において認めるべき、歴史の根源的な4つの契機を次のようにあげて考察している。

歴史の根本条件について—「第1の歴史的行為は、これらの(衣食住)欲望をみたすための手段の産出、すなわち物質的生活そのものの生産である。しかもこれは、ただ人間の生命をつなぐためにも、今日なお数千年まえとおなじく日々刻々やりとげられねばならない歴史的行為であり、あらゆる歴史の根本条件なのである。」^{註④}

第1の点——「この(前にのべた歴史的な根本条件)根本事実をその全意義とその全範囲^{註⑤}にわたって観察し、それに当然の地位をみとめることである。)

第2の点——「……そしてあたらしい欲望のこの産出こそ第1の歴史的行為なのである。」
(前述)

第3の点——「他人の生命の生産」を行うこと。「この家族は、はじめは唯一の社会的関係であるが、あとになって欲望の増加があたらしい社会的関係をうみだし、そして人口の増加があたらしい欲望をうみだすようになると1つの従属的な関係となる。」^{註⑨}

第4の点——「生命の生産」は、「そのまますぐに2重の関係として——一方では自然的な、他方では社会的な関係として——あらわれる。」ということ、そして協働様式と結びついている「生産諸力の量は社会的状態を制約」しているということである。マルクスは、このように歴史の根本条件と歴史のもつ根源的な4つの面を示したあとにいよいよ人間の「意識」(Bewusstsein)、「精神」(Geist)の問題をとりあげている。

さて、私はここで、家政学を定義する場合に、引用される著書のいま一つのものについて説明しておかなければならない。なぜならそれは、しばしばその1部分のみがとりあげられ、また前述した「ドイツイデオロギー」における見解と、直接の関連をもっているにもかかわらず、そうした関連をもって説明されたものをみていないことにもよる。いま、この意味で引用し説明を加えようとするものは、もちろんエンゲルスによる「Der Ursprung der Familie des Privateigentum und Staats」、「家族、私有財産 および国家の起源」の初版序文における有名な1節である。

「……歴史における究極の規定的要因は、直接的生命の生産と再生産とである。しかし、これはそれ自体さらに2とおりにわかれる。1方では、生活資料の生産、すなわち衣食住の諸対象とそれに必要な道具の生産、他方では、人間そのものの生産、すなわち種の繁殖が、これである。ある特定の歴史的時代およびある特定の国土の人間の生活がいとなまれる社会的諸制度は、2種類の生産によって、すなわち、1方では労働の、他方では家族の発展段階によって、制約される。労働がなお未発達であればあるほど、またその生産量が、したがってまた社会の富が乏しければ乏しいほど、社会秩序はそれだけ圧倒的に血縁の紐帯に支配されるものとしてあらわれる。」^{註⑩}

「ドイツイデオロギー」は、1845年から1846年にかけて、「家族、私有財産ならびに国家の起源」は、1884年にだされたものであるが、いずれにせよ、ここには、2人の歴史に対する共通した基本的なみかたを見出すことができる。

私はいまこのマルクスとエンゲルスの考え方をかなりくわしく紹介してきたのであるが、ここではっきりさせておかねばならないことは、これらがまさに人間の生命活動とその継続的な発展を可能にするという意味において他のいかなる事実によってもおきかえることのできない真実そのものだということである。そして、このことから私たちが結論できることは、人間の生命活動におけるもっとも根源的な単位が人間の歴史のはじめにおいても、また人間が生まれるという事実が、いかなる人間関係によってもたらされるかという意味においても、さらに人

間が生まれて、さいしょに結ばれる人間関係が、いかなるものであるかという意味においても、それが家族だということである。したがって、このさいしょにして唯一の社会関係の中における人間の生命活動がいかなる契機と法則にもとずいて展開されるかは、もはや明らかといわねばならない。第2項のはじめにおいてのべたように、人間が生命活動をはじめるとき、存在するものは、主体者として1人の人間と他の人間との関係、そして自然との関係であった。この主体者としての人間は、つねに新しい欲望を起点として行動し、2つの生命の生産を行う、そして協働による生産諸力の量が、そこに存在する社会的状態——それが人間のはじめにして唯一の社会関係としての家族——を制約するのであった。その家族という社会にあっての1人の人間の生命活動は、したがって、多様な欲望の実現というものは、自然との関係と家族との人間関係の中で疎外されざるをえない。この意味で、われわれは人間個人の疎外された状況を自然との関係において、また家族という社会的な関係の中からいかにすくいだしたらよいかを考えなければならない。社会は、こうした家族にもとづく社会から、1元的に社会の発展に応じて必然的に社会そのものの分業化の途をたどることになる。そして、今日までの分化の過程において人間の生命活動におけるもっとも根源的な機能が、いぜんとして人間の家族的社会関係の中に、とどまっていることは、明らかなことである。

以上私はこの項において人間の生命活動存在の条件と歴史的にみた生命活動を考察することによって、家政学という学問の焦点が、本質的にどこにむけられるべきものか、そのためのおおよその方向を示すことができた。それでは、こうした前提にもとずき、つづいて家政学の目的について考えてみることにしよう。

3. 家政学の本質——その目的と内容

学問というものは、人間がある特定のことがらを知ろうとして精神的な労働を必要とするところに成立の起点があるのであるから、そこには、当然一定の目的と目的達成のために何に働きかけたらよいか（対象）、また目的を達成するためには、対象をどのように研究したらよいか、その場合どのような体系的な研究が必要とされるのかが明らかでなければならない。家政学の目的を考えるにあたってまず、これまで家政学においてどのような知的欲望にもとづく学問的成果が家政学という学問をなりたたせてきたかを考えてみる必要がある。そしてこれらの知的欲望、学問的成果を抽象してみると、これまでの家政学発達の段階におけるもっとも共通の分母として理解されてきた概念は、「家庭」あるいは「家族」という概念であるということがわかる。「家庭」、「家族」という概念の用い方は、さまざまではあるがしかしいずれの場合においても、それらの学問上の成果が、「家庭」を場として展開されるものであり「家族」によって営まれる生活に関連しているという意味において、共通するという事実は、あまりにも明白である。「家族」という概念が、われわれの歴史において、どのようにして生まれてくるものであるかを前項にもどって考えてみると、われわれは、そこに「家庭」「家族」

というものが本来、人間にとってどのような存在であるかを知ることができる。すなわち「家族」というものは、歴史のはじめにおいては唯1の社会的関係であり、したがってそこに成立する家族社会においては、人間の第1の歴史行為である欲望にもとずいて生きるために必要なものがつくりだされておりさらに血縁的な家族の協働によって自らの生命を日々あらたにつくりだしている人間が他の人間をつくりだしているということが、理解されるのである。いいかえるなら、それは、生命の生産と新しい世代の再生産を行なうものだといってよい。そして、このことは家政学者たちの共通の問題意識となっている「家族」のもっとも究極的なもの、すなわち本質というべきものである。

以上のことから、私は家政学の目的を家政学の本質となるべき生命の「生産・再生産」について研究することにあると結論する。それでは、ひきつづいての課題はこの目的をどう実現したらよいのか、目的達成のための手段として考えなければならない研究の対象は何かということである。対象は、抽象的にいえば「生命の生産・再生産」ということであるが、実際に研究をはじめるとあたって、それは具体的に現象しているものでなければならない。現象というものは、本質となるべきことからの現象、あるいは現象形態ということである。従って本質が現象するということは、人間の場合においては、生命活動としての行為そのものとなって現われるということであり、しかも、その行為が1人の人間によって行われるのではなく、つねに人間によって社会的につくりだされたものを基盤にして協働というかたちをとらざるをえないのであるから、行為する以上、その行為は必然的に一定の社会的関係をつくりだし、従ってそこに一定の社会をつくりだすことになる。つまり、目的実現の行為は、きまって社会的な現象形態をとるわけである。この意味において、生命の生産・再生産を行なうのは、生きる主体としての自分自身であり、行われるところは、自分自身と協働する人々によってつくりだされる社会だということがいえる。目的は社会的な行為によって実現されるのである。従って、この本質の現象形態にあっては、これまでの歴史の現段階において、そこでの協働が血縁的な人間関係にもとずいて行われているのであるから、それを構成する人々を家族と呼ぶなら、われわれは目的実現の行為は、家族社会という現象形態の下になされているということができる。そして、この家族社会を家庭ともしよぶのであれば、その現象の形態を家庭とよんでよいわけである。

これまでの段階においてなしうる結論は、家政学における研究対象は、本質としての生命の生産・再生産の現象形態である家族社会、すなわち家庭だということである。しかし、ここで注意されるべきことがある。この対象としての家庭（ここでは家族社会の同義語として定義された）は、決して固定された絶対的、不変的な対象として考えられてはならないということである。家庭は、結局のところ、家政学の本質であり目的をなすところの現象形態にすぎない。したがって、この現象形態が、歴史の進展とともに、それとともに変化するということは、われわれによって充分予測されなくてはならない。そうしたあやまりにおちいらぬために、われわれにとって必要なことからは、生命の生産、再生産という家政学の本質であり、

目的とされるものが、どのような法則にもとづくものであり、それがどのようなかたちで現われるものであるかを正しく把握しておくことである。目的と対象、本質と現象の間の関連を有機的に理解しておくことである。そのことを明確に把握、前提することによって、家政学者のこれまでの問題意識とその追求の中から見出される家政学の本質、そしてその目的達成のための研究対象、また本質の現象形態が、これまでの歴史段階においては家庭にあったということを理解することができるのである。それによって家庭の外において現象しはじめたものが、どのような性質のものであり、家政学は、それをどう扱っていけばよいかを、判断することができるのである。

4. 本質の展開

さて、こうしたことから、生命の生産・再生産を研究の目的として家庭という研究対象を考察する場合、人間の生命の生産・再生産のための活動が、どのような行為として現われるものであるかを、そしてそこに成立する現象形態について考えてみたい。

第1は、生きるためにもっとも基本的な欲求を充たすために行動すること、つまりそのために必要な物質を獲得するために働らくということである。ところで、人間が欲求に基いて1つの目的を達成しようとする場合、当然そのための手段となるものが必要となる。従ってこの場合に問題になることは、順序としてまず生きるための欲求が、何であるかということを確認し、そのためにどんな手段が必要かを考えることである。そしてつぎに人間が生きるためのさいしょの行動は、欲求を充たすための手段を獲得する（つくりだす）ということになる。このことは人間が生産活動を行なう場合のさいしょにして唯1の社会関係である家族を単位とした協働の形式をとって行われる。どのようなものが、どれだけ必要であるのか（どういう欲求であるのかということ）、家族を単位とした質と量の問題、それを目的とするなら、そのためにどのような手段がどれだけ必要なのかということが対置されることになる。この場合の手段は、労働手段と道具をさしている。労働手段は、働く力であるから、その労働力をつくりだすこと、そしてつくりだされた家族の労働力のすべてが目的の達成にあたって不足すれば、それだけの労働力を買わなければならない。道具についても、必要なだけのものをつくるか、購入するかである。労働力や、道具をととのえるために必要な収入をどのようにして、どれだけ確保するかも、ここでの問題である。

こうして目的が定められ、必要な手段がととのえられると、手段をどのように用いて目的を達成するかという方法上の問題を考えなければならない。食欲について、それを充たすためにどんなものをどれだけつくるのか、そのために必要な労働力と必要な物をどう用いたらよいかという問題、これは目的実現のための、管理上の技術的な問題に属する。

これらのことがらは、いずれにせよ、家庭を単位とした人間の生命の生産にあたって、欲求を明らかにしその基本的な欲求を充たすために、労働力や道具といった手段をどうやってどの

ようなものをどれだけつくりだすかということ、獲得したものを、どう用いるべきかその方法についての問題である。

第2に、生命の再生産活動において、基本的に充足されるべき目的として、具体的に、いま何が欲求されているものであるかが、正確にされていなければならない。歴史的な各々の発展段階において、1つの新しい欲求の充足は、直ちにもう1つの新しい欲求を生みだしている。あらゆる歴史的、社会的条件の変化と、同時に生命の生産、生きるために必要な欲求におけるあたらしい欲望の相対の中で、1人の人間の欲求を家族全体の欲求として実現していくためには、正確な現時点における欲求の把握はどうしても必要な問題である。こうして見究められた欲求が、行動の契機となり、そこに展開される社会関係のあり方をきめる要因にもなるのである。

第3は、新しい生命をつくりだすという意味における生命の再生産とそのために行う行為である。この行動は、夫婦関係の成立、子供の誕生による親子関係の成立というかたちをとらない、現象形態としての家族をつくりだすものである。ここでは、新しい生命をつくりだすのもっともふさわしい人間関係のあり方を、1人の人間の行為にもとずいて考えていかなければならない。

第4の問題は、生命の再生産の現象形態として現われた人間の行為とそこに成立した社会が、一定の原則によって支配されているということである。それはマルクスの「生産諸力の量は社会的状態を制約する」という問題であり、エンゲルスによれば「……社会的諸制度は2種類の生産によって……制約される。労働がなお未発達であればあるほど、またその生産量が、したがってまた社会の富が乏しければ乏しいほど、社会的秩序はそれだけ圧倒的に血縁の紐帯に支配されるものとしてあらわれる」という問題である。この問題は、家庭が社会全体の発展段階における生産諸力の量によって基本的な制約をうけるということと、家庭における人間関係が、家族全体の協働にもとづく生産諸力の量が、どれだけのものであるかによって制約されるということの意味している。家庭における生産諸力の量は、いうまでもなく、家族の労働力とその労働力によってつくりだされたものに他ならない。そして、さらにそのことが、現象形態としての家庭に与える影響を通じて、本質としての生命の再生産に、どのような影響を与えるかを検討しなければならない。つまり、ここでの結論は、国民経済と家庭経済の問題、家庭経済と家庭経営の問題として、生命の再生産活動を考察すべきだということなのである。

5. む す び

以上で「家政学の本質とその展開〔I〕——その目的と対象」についての説明を終える。同じく〔II〕における課題は、上記の論述にもとずいて家政学の体系について考察することにある。この論稿における論旨は、①家政学のジャンルが存在するものとして社会科学にあること、②人間の歴史そしてそれを構成するモメントと家政学者の共通の問題意識とされた家庭、あるいは家族等々との関連において、後者は前者に起点を同じくして周延される関係にあるこ

と、③従って、その前提から家政学の本質を導きだし、家政学の目的を生命の生産の研究としたこと、④さらに研究対象を考察するにあたって、それを本質の現象形態としての家族社会、家庭としたこと、⑤さいごに、目的の達成のためになぜ対象として家庭がえらばれたか、また本質の現象形態をいかなる方法をもって解明すべきかということ、以上5点を中心にしていく。論旨のそれぞれの点において論証不十分な点も多いが、大方のご叱正により次回を期すことにしたい。

(註)

- ① Max Weber : Die "Objektivität" sozialwissenschaftlicher und sozialpolitischer Erkenntnis, 1904
「社会科学方法論」岩波文庫版 10頁
- ② 昭和42年度「私立短大家政科系教員研修会資料、82頁
- ③ Karl Marx, Friedrich Engels : Die Deutsche Ideologie. 「ドイツ・イデオロギー」岩波文庫版 34頁
- ④⑤ 同上 35頁
- ⑥ Friedrich Engels : Ludwig Feuerbach und der Ausgang der Klassischen deutschen Philosophie.
「フォイエルバッハ論」岩波文庫版 68頁
- ⑦ 「ドイツイデオロギー」 同上 36頁
- ⑧⑨ 同上 36頁
- ⑩ 同上 34頁
- ⑪ 同上 35頁
- ⑫ 同上 36頁
- ⑬ Friedrich Engels : Der Ursprung der Familie, des Privateigentums und des Staats.
「家族・私有財産および国家の起源」国民文庫版 8頁

参 考 文 献

- ① Max Weber : Die "Objektivität" sozialwissenschaftlicher und sozialpolitischer Erkenntnis, 1940
「社会科学方法論」富永祐治・立野保男共訳 岩波文庫版
同上 出口勇蔵訳 河出書房版—世界の大思想23
- ② Marx-Engels Gesamtausgabe, Erste Abteilung, Band 5 : Die Deutsche Ideologie.
「ドイツ・イデオロギー」世界の思想12 岡崎次郎訳 河出書房版, 同上、古在由重訳 岩波文庫版
- ③ Friedrich Engels : Ludwig Feuerbach und der Ausgang der Klassischen deutschen Philosophie.
「フォイエルバッハ論」松村一人訳 岩波文庫版
- ④ Friedrich Engels : Herrn Eugen Dührings Umwälzung der Wissenschaft.
「反デューリング論」粟田賢三訳 岩波文庫版
- ⑤ Friedrich Engels : Der Ursprung der Familie des Privateigentums und des Staats. (Bücherei des Marxismus - Leninismus), The Origin of the Family, Private Property and the State.
(International Publishers, 1942.) 「家族・私有財産・国家の起源」戸原四郎訳 岩波文庫版,
同上、村井康男・村田陽一訳 国民文庫版
- ⑥ 「人間と社会」人間の科学3、川島武宜編 中山書店版